



四万十町
町内ぶら〜り散策

志和 浦分 ①



東 又より志和峰を経て、海に向かつて坂を下る。志和は、太平洋に注ぐ志和川に沿って拓けた地区である。坂をほぼ下り切った辺りからの農村地帯が郷分。海沿いの集落が浦分である。浦分には現在84世帯、129人が暮らしている。

志和の地名の由来であるが、岩礁（海中の浅いところに隠れている岩）によってただける波（礁波）からきているという説がある。二千年以上前の古代から人が住んでいたことが、この地の出土品からうかがえる。鎌倉時代末期にはすでに集落が成立している。戦国時代に入ると、志和・志和峰・与津地・大鶴（弦）津・小鶴（弦）津・大矢井賀（加）・小矢井賀（加）「二矢井賀は現中土佐町」の「志和七カ村」を形成していた。江戸期にはいって、志和は浦分と郷分とに支配がわかれ、それぞれに庄屋がおかれることとなる。

近代になるまでは、江戸や京都・大坂との行き来は、険しい四国山地を避け、主に海路を使っていたため、窪川をはじめとする四万十川流域の人々にとって、志和はたいへん重要な物流拠点であった。窪川（仁井田郷）一帯で穫れた米のうち年貢米を差し引いた余剰分が、この志和の港から大坂へ「出荷」された。荷を運ぶのは志和の人である。志和の人たちは運賃収入を元手に、大坂で昆布や衣類などさまざまな物資を仕入れて帰ってくる。それらを、窪川の市（現在の古市町）で売るのである。窪川地域の一大物流拠点で



薬師寺は志和氏の菩提寺でもあった

あった志和には、各種商店だけではなく、大きな倉庫や銀行まであり、大いにぎわっていた。

志和の人々が海運業を安定的におこなったのには理由がある。それは、高い操船技術と、優れた造船技術をも身につけていたということである。

戦国期、長宗我部元親が行った調査によると、志和には「船頭二人、水主三人、番匠三人がいた」とある。船頭は船長、水主は航海技術を持った船員、番匠は船大工である。1592年、豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄の役）では、志和城の城主以下、100名近くの家臣団が、志和の番匠たちが作った船に乗り、船頭と水主の操船によって出兵している。

幕末、海岸線の高台には、砲台が作られた。これは海上を通過する外国船の見張り台としての役割を果たした。外国船が発見されると、窪川の役人に知らせるための狼煙が上がったという。

浦分の氏神様（産土神）は諏訪神社。また、志和には室町時代の初めの建武二年（建武の新政の頃）に建立されたとされる薬師寺がある。

町のうごき

(2月28日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,256	-15	男 6	16	8	15
女	9,227	-6	女 5	17	13	5
計	17,483	-21	計 11	33	21	20
世帯数	8,556	-6	(2月中の届出)			

窪川地域 12,316人 大正地域 2,473人 十和地域 2,694人

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	3月13日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.504
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05
化学的酸素要求量	≤ 10.0	2.013

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部

四万十町通信

2018.4月号
Vol.145 (毎月10日発行)

●発行／四万十町企画課 ●印刷／窪川印刷

〒786-8501 高知県高岡郡四万十町琴平町16-17

☎ (0880) 22-3124

FAX (0880) 22-3123

UD FONT
by MORISAWA

本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォントを採用しています。